

学生の心に残る保育場面

横山 洋子

保育者を目指している短大二年生に、自分自身の幼稚園・保育園時代の出来事で、心に残つて いる場面を書いてもらいました。

〈場面1〉

年長組の冬、白い紙を指でちぎり、雪だ

るまを作った。先生に見せると「あらー、○ちゃん。うまく丸ができたじゃない」と笑顔で私の両手を握ってくれた。その時の先生の笑顔はとても優しくて、まるで自分のことのように一緒に喜んでくれた。

この記述から、保育者に認められた子どもの

喜びが感じ取れます。「うまくできたね」と、自分のしたことを肯定的に受け止められ、言葉で返されたこと。そして、保育者が子どもの両手を握り、まるで自分のことのように喜んでくれたこと。そのことが、さらにこの子に保育者を「親しい存在」と感じさせ、喜びをふくらませてくれたのでしよう。

保育者は一日に何度も子どもを認めることばかりかけていますが、その子が熱心に努力してやつたことを察知して、その子に見合った対応をすることが大切でしょう。このような、保育者にとつては日常的な出来事でも、子どもの心には大切な思い出としてしまわれていることを、改めて認識させられます。

この学生は、現在の自分の視点で過去の出来事を見つめています。恥ずかしくて立候補できない自分の存在に気付いて、声をかけてくれた保育者。あの経験がなかつたら、今の自分はなかつたかもしれない今まで思っています。それほど、この子の生き方に大きな影響を与える出来事だったのでしょう。表現できないでいる子

（場面2）
運動会の大太鼓をたく人を決めるとき

どもの思いに気付き、可能性を開くきっかけをつくることも、保育者の大切な役割のひとつだと考えられます。

この学生は、きっと、子どもの小さな変化も見逃さず内面を深く読み取れる保育者になろうとすることでしょう。

〈場面3〉

お昼寝ができなかつたとき、先生はいつもすごく嫌な顔と怖い声で「○ちゃん、ちゃんと寝なさい」と言つた。それでも眠れない私は布団の上で何かをしていると、

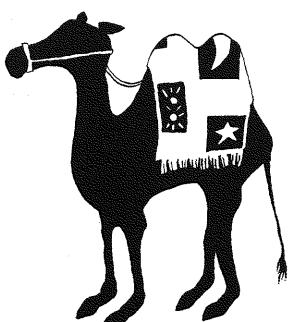
「寝られなくともいいから、横になつて布団に入つていなさい」と怖い顔で言つた。私は怒られるのが怖かつたので、仕方なく横になつていた。

昼寝の時間に、なかなか寝付けない子どもは

多いようです。まだ遊びたいのに寝なさい、と言われることは、子どもにとつて苦痛でしょう。保育者は、子どもが寝ないと連絡帳を書く等の仕事ができないので、早く寝てほしいのだけれど思われます。

この学生は、保育園時代の一番心に残つている出来事として、この場面を挙げています。他に楽しいこともたくさんあつたでしょうに。そこに、一抹の寂しさを感じます。

次も、同じく昼寝の場面です。



（場面4）

私は昼寝が一番嫌いだった。だからいつ

も人形を持つて小さい子のクラスへ行つていた。その先生は「あれ、○ちゃん、今はお昼寝の時間よ」と言つたけど、無理に寝かせようとはせず、「じゃあ、この子たちを寝かせてくれる？」と優しく言つてくれて嬉しかったことを覚えている。

この学生も、昼寝が嫌いだったことを告白しています。でも、小さい子のクラスへ行くと、「寝ないこと」を受け入れられ、「小さい子を寝かせる」という役割をもらい喜んでいる様子が伺えます。

私たち保育者は、みんなに同じことをしてほしいと願い、働きかけることがあります。けれども、そのことが、一人一人の子どもにとって、どのような経験として心にため込まれ

ていくか、吟味していく必要があるでしょう。

学生が挙げた保育場面を紹介し合い、保育者として何を大切にしていくのか、もし自分が保育者だったら具体的にどのように対応するのか、ということについて考えています。もちろん、答えは一つではありません。そのときの状況や、子どもに対する願いに応じ、いろいろな方法があるということを知り、ポケットに入れで置いてほしいと思うのです。そして、子どもの方の側に立つた保育者としての心を育てていってほしいと願っています。

（千葉経済大学短期大学部）